

Title	『アプフェルベク,または野の百合』 : 解釈の一試み
Author	三上, 雅子
Citation	人文研究. 33 卷 8 号, p.522-539.
Issue Date	1981
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

『アプフェルベク、または野の百合』

— 解釈の — 試み

三 上 雅 子

1922年キーペンホイヤー出版社は戯曲『パール』の公刊と併せて、近々同一作者の手になる詩集をも出版する旨読者に予告する。しかし作者と出版社の意見の食違いからこの予告は果たされるには至らず、それから4年後詩集は『ベルトルト・ブレヒトの携帯用説教詩集』との表題のもと、著者の発案により『聖書』とまったく同じ装丁が施されて、わずか25部の限定私家版の形でようやく活字となった。『ベルトルト・ブレヒトの家庭用説教詩集』として今日知られている彼の処女詩集が世に出るには、更に1年の時の経過が必要であった。

この出版をめぐる経緯が我々に語るのは、1927年時点においてすでに詩集の作品世界がブレヒトの内面生活において「過去に属していた¹」という事実である。『家庭用説教詩集』収載の詩の多くが1916年から1920年にかけて成立したものであり、²それゆえに「その構想原理はアウクスブルク時代の思想世界から説明されねばならない」とするクラウス・シューマンの指摘はおおむね正当である。³1927年、ブレヒトはすでに一定の知名度を有する劇作家であり、ベルリンに居を定めマルクス主義の学習にも手を染め始めていた。翻って、『家庭用説教詩集』の舞台をなすのは地方都市のアウクスブルク、ブレヒトは世に出る機会を模索する作家志望の大学生にすぎず、彼の内面生活の大きな部分を占めていたのは、幾多の女性達との恋愛三昧、それにもましてカスパー・ネーヤー、ゲオルク・プファンツェルトらブレヒト一派と称された友人達との交友、創作活動の中心をなすのは戯曲『パール』との精力的な取り組み、遠雷の如く響くのはバイエルン革命であった。

第1次世界大戦勃発後しばらくの間は周囲の愛国的雰囲気⁴に足並みを揃えていたブレヒトが、戦争を遂行する社会とそれを支えるヴィルヘルム二世朝式イデオロギーに決定的に背を向けるのは、1916年初めて本名のベルトルト・ブレヒトで発表した詩『フォート・ドナルドの鉄道建設隊の歌』を境にし

てである。自然の猛威にさらされながら非情の森——死——へと向かう男達を描いたこの詩が、『家庭用説教詩集』の基調色となる。そこでうたわれるのは、もはや戦場でも少年兵士とその母でもなく、森や海や大地、なべて人間を死に至らしめる自然であり、登場人物は海賊、無法者、子殺しの女など神からも社会からも見捨てられたアウトサイダー達である。ハンナ・アレントはこの時期のブレヒトの心象風景に対する解説として、第2次世界大戦後の精神状況に触れたサルトルの次の言葉を引用している。

「諸機関が毀れ無用のものとなり、種々の計画が挫折し努力が無意味なものとなったとき、世界はあたかも無の中を連関なく漂っているかのように、恐ろしくも子供のように無邪気にみずみずしく、姿を現わす。」「⁴「恐ろしくも子供のように無邪気なみずみずしさ」が、『家庭用説教詩集』のすべての主人公から語りかけている。」⁵

既成の価値体系が崩壊した後に残るのは、歴史性、社会性を剥ぎ取られ、生物の次元にまで還元された形象群だ。我々がここで考察の対象として取りあげようとする親殺しの少年もその一例、恐らくは最も衝撃的な例に他ならない。

I

「アプフェルベク、または野の百合」

1

和やかな陽を受けてヤーコブ・アプフェルベクは
じぶんの父と母を叩き殺した
そして2人を洗濯ものを入れる戸棚へつっこんで
家に残った、ひとりっきり。

2

空の下雲は漂い行き
夏風は和やかに家のまわりを吹いていたが
家のなかにはかれがじっとすわっていた
7日まえにはまだ子供だったその子が。

3

日々は過ぎ、夜々もまた過ぎ、
何も変らなかつた、いろいろのことを除くと
両親のそばでヤーコプ・アプフェルベクは
ただ待っていた、何でも来るなら来いと。

4

牛乳屋の女はまだミルクを届けてくれる
脱脂ミルクを、甘くて濃くてひんやりしたの。
飲まない分を、かれはあけて捨てる
というのでも飲むこともないのだ、もうあまり。

5

新聞屋はまだ新聞を配達する
どたどたと夕べの光を受けて
郵便受けにカタッと投げこんでゆく
がヤーコプ・アプフェルベク、それを読まない。

6

死体が家じゅうに臭いだしたとき
かれは泣いた、その臭いで病気になった。
そして泣きながら部屋を出て、それからは
もうバルコニーでしか眠らなかつた。

7

毎日来る新聞屋がいった。
何が臭ってるんだらう？いやな臭いだな。
和やかな陽を受けてヤーコプは答えた、
そりゃ、戸棚の洗濯もの。

8

毎日来る牛乳屋の女が、あるときいった。
何でこんなに臭いがするの？まるで死人の臭いみたい！

和やかな陽を受けてヤーコブは答えた、
棚で腐った仔牛の肉だ。

9

ひとびとがとうとう戸棚をあけたとき、
ヤーコブは和やかな陽を受けて立っていた
そして、なぜこんなことをした、と問われて
かれは答えた、ぼくにはわからないと。

10

牛乳屋の女は、しかしその翌日こういった、
あの子もいつかは、遅かれ早かれ
あれでもいつかは参るんでしょ⁶うか
あわれな両親のお墓に？

1919年に成立しリオン・フォイトヴァンガー夫人に捧げられたこの詩には、詩集冒頭に置かれた「個々の読章を使用するための手引き」の中で、作者自身により次のような短かい注釈が与えられている。「第2の詩で言及されるアプフェルベクは、1906年にミュンヘンに生まれ、1919年に両親を殺したことによって知られた。」⁷

ブレヒトはしばしば、おそらくは文学作品が天才の独創性の産物であるとするブルジョア社会特有のロマン主義的芸術観に異議を差しはさむ目的で、まったくの虚構である自己の作品に関してモデルの存在を匂わせることがあった。そのもっとも知られている例は、「パール」の主人公のモデルとしてヨーゼフ・Kなる修理工を挙げたことに求められよう。⁸しかしながら、このアプフェルベクの場合にはそうしたブレヒト一流のトリックを心配する必要はなく、彼の注釈を文字通りに受けとめることが出来る。1919年8月18日から21日にかけてミュンヘンの新聞は、アプフェルベクという少年が両親を殺害し、その死体と3週間も起居を共にしていた事件をセンセーショナルな筆致で報じているのである。ブレヒトが9月2日には早くもこの詩をカスパー・ネーヤーに見せている点から推して、彼は事件の報道を目にするや時を移さず、世間に驚愕と嫌悪の念を引き起こした犯罪から一篇の物語詩を作りあげたと言うことになる。

ギターにのせて歌われるべく曲が附されている『アプフェルベク、または野の百合』は、形式の面からも現実に起こった事件に材を仰いでいるという成立事情の面からも、伝統的民衆文学の1ジャンルを成す大道歌 (Bänkelsang) に極めて近い。歌手が小さな台 (Bänkel) にのるところからこう名付けられた大道歌は、歳の市などで多くの人々を魅きつける呼び物であった。アウクスブルクの歳の市 (Plärrer) を愛していたブレヒトもまた、そうした聴衆の1人であったのだろう。歌の主題として好んで取りあげられるのは血腥い犯罪であり、歌手は背後に歌の内容を描いた絵を並べ、歌の進行に合わせてそれを棒で指し示した。15世紀にまでその発生を溯ることのできる大道歌は、娯楽の少なかつた社会にあって刺激的な事件を歌いあげることにより、人々に恰好の気晴しの種を提供していた。その一方、結末は必ず勧善懲悪、神の摂理の賛美で締めくくられるのが約束事であったから、民衆に対する道德教育の機能を果たしていたとも言えよう。人々は事件の残虐さに胸を踊らせはするが、最後には自己の抱く既成の道德観の正当性を再確認し心安んじて日常生活へ戻っていくのである。

ブレヒトの詩は、「または (oder)」という接続詞でつながれた副題の存在、擬古的な語の使用 (Vater und Mutter sein, ward, einstens) などを通じて、現代における大道歌の再現を意識していたことを窺わせる。形式的には伝統的衣装をまといながらもしかし、この詩の内部に広がる世界は大道歌のそれとはまったく相貌を異にする。

両者を最も判然と分かつのは、前者における教訓の不在であろう。大道歌はそれがたとえいかに非道な犯罪を扱ってしようとも、終結部に置かれる教訓ゆえに窮極的には既存の価値体系の一部を成しており、一場の娯楽としての無害さに安住している。それに対してブレヒトの詩にあっては、本来教訓に捧げられるべき最終連で牛乳屋の女が、

あの子もいつかは、遅かれ早かれ
あれでもいつかは参るんでしょうか
あわれな両親のお墓に？

といささかセンチメンタルな、そして場違いな感想を口にするのみで、作品全体は作者のこの事件についての価値判断を提示することなく唐突に終りをつける。彼女の言葉は事件にグロテスクな滑稽味を付け加えこそすれ、いか

なるカタルシスをも読者に与えないことは明らかだ。

我々がこの詩から受け取る読後感は、一篇の犯罪実話が引き起こす一過性の興奮などではなく、日常性の背後に口を開けている「無気味なもの (das Unheimliche)」の予感である。13才の少年が両親を殺害した事それ自体が無気味なのではない。どのように異常な出来事であろうとも、合理的説明が下される限りにおいてそれは我々の価値基準を脅かしはしない。アプフェルベクの行為にまつわる無気味さの本質をなしているのは、説明の拒否、判断の停止なのだ。それに加うるに、少年が逮捕の瞬間に至るまで完全な無感動の内に閉じこもって何物か名指されない物を待ち続けていたこと、更に撲殺とその後の死体の腐敗という嫌悪すべき内容と穏やかな語り口との乖離が一層読者の不安感を助長する。

「説明の不在によって光彩を放つ」¹⁰との評が適切に示すように、この物語詩はまさにその意味付けの拒絶ゆえに近年ますます多くの解釈者達を魅きつけている。ヴォルフガング・カイザーのもはや古典的となった「グロテスク」の定義、

「グロテスクなものでは、1つ1つの行為それ自体や道徳的な世界秩序の破壊が（これも1つの構成要素をなすかもしれないが）、問題なのではなく、まず第一にすでに自然的となっている世界定位の拒絶が眼目なのだ。（中略）グロテスクなものを表現する者は、意味を暗示しようとしてはならないし、暗示することもできない。」¹¹

に耳を傾けるまでもなく、この詩はグロテスクなものの見事な典型に他ならないし、不条理が意味と安全性の欠如であるとするなら、ここに第2次世界大戦を契機として出現した不条理文学の先駆を認めることも決して飛躍ではない。少年の「待つ」姿勢に重点を置くならそれはやがて「ゴドーを待ちながら」に至るであろうし、殺人の無動機性は「異邦人」を想起させうるに足る。

しかしながら、この小論においてはこれら現代文学との親縁性において作品を論ずることは一先ず断念し、考察の対象をもっぱら作家と作品との関係に限定することとしたい。言いかえるなら、ブルジョア社会との同調から挑発的なニヒリズム、そしてついには社会変革へと発展していくプレヒト自身の成長過程にあって、この両親殺しをテーマとして持つ詩がどのような位置

を占めているのか、1919年段階での作者の精神状況をどのように反映しているのかと問うことが、本論の目的となる。

解釈の試みの出発点としてまず取りあげねばならないのは、詩の素材となった現実のアプフェルベク事件である。

「ミュンヘンで16才の少年が両親を殺害し、すでに腐敗の度がひどく強い死臭を放つ死体と共に、3週間にわたって狭いアパートで起居を同じくしていた。(中略) アパートには工場労働者ヨーゼフ・アプフェルベク、その妻マリア、ならびに16才のヨーゼフが住んでいた。(中略) 寝室に通じるドアを開けると、2台の並んだベッドと、台所と寝室を仕切っている壁との間に完全に変貌した所帯主の死体が横たわっているのが見えた。(中略) ベッドの横の床には、上半身をはだけられ同様に識別不可能なまでに変貌したA夫人が横たわっていた。夫の死体の下腹部には銃痕、胸部には刺し傷が見られ、妻の死体には胸部に銃痕があった。16才の息子は帰宅していなかった。(中略) 日曜日以来彼の姿は見受けられなかった、おそらくは2人の同年輩の仲間が、警察に通報したと彼に告げ知らせたからであろう。(後略)」

「(前略) 彼の自供によれば、事件当夜8時頃、映写技師の職に応募したいという彼に母親が反対し罵ったことから争いが持ち上った。(後略)」¹³

新聞報道が明らかにする如く、事実と虚構たるブレヒトの詩との間には幾つかの無視できぬ差異が存在する。現実のアプフェルベク事件のどの要素が捨て去られ、それに代って何が加えられたのか。この事実関係の取捨選択の内にこそ、分析のメスを拒むかに見える作品を解明する手がかりが探られねばならない。

詩の表題そのものがすでにブレヒトによる事実の改変、つまり少年の名前がヨーゼフからヤーコブに変えられたことを明らかにしている。その理由が往々指摘されるように単に音の響きを考慮してのことなのか、或いは一歩進んで旧約聖書中のヤーコブへの連想へと読者を誘おうとしているのか、¹⁴ 早急に断を下すに足る資料を残念ながら我々は持たない。

解釈者の注意を今ひとつ喚起するのは、少年の年齢の食違いであろう。詩におけるヤーコブは13才、実在のヨーゼフはそれに対して16才であった。カール・ピーツカーなどは「ブレヒトは彼の年を引き下げた」¹⁵として、ここに作者の無動機性の強調を読み取ろうとしている。確かに両親殺害者を13才と

設定することにより、犯行の残虐さと犯行者の無意識性との対比は強まり、作品の *Mystifikation* が16才であったとする場合と比較して一層完璧となること、論を俟たない。しかし、この解釈に全面的に賛同するのを許さない根拠もまた存在する。ブレヒトは掌篇小説『思いつき』においてもアプフェルベク事件に言及しているのだが、¹⁶そこでも詩の場合と同様アプフェルベクは13才となっており、この点から推して年齢の違いが深い意図のない単なる記憶違いの産物である可能性も捨てきれないことにはできないのだ。

更に現実の事件では凶器としてピストルが使用されているのに対して、詩ではそれが撲殺というより原始的手段に置き換えられていることも我々の目をひくだろう。これについてはピストルの持つ現代性を取り去ることによって、作品全体が大道歌にふさわしいいわば前近代的な趣きを帯びるという効果がとりあえず指摘されうる。

以上あげた3点の改変はしかし、——それらがことごとく意識的なものであるかどうかは、ひとまず置くとしても——作品解釈の上では副次的な役割を担うにすぎない。我々の解釈に本質的に寄与するであろう次にあげる一群の変更点はすべて、作者の明確な目的意識に支えられている。つまり、犯行の動機にいささかなりとも暗示を与える要素の消去である。

事件の報道は我々に、少年が当時失業中であったこと、職探しをめぐって母との間に争いが持ち上ったことを教えている。ところが犯行の心理的背景、家庭内の人間関係が産み出す葛藤についてはブレヒトは一言も触れはしない。

「ヨーゼフが2度目の結婚から生まれた子供であること、6才まで養母のもとで過ごさねばならなかったこと、同じく父親がかつて暴力行為のために刑務所に入っていたことや母親が窃盗の嫌疑をかけられたこと、これらは言及されないままである。」¹⁷

そして心理的要因にもまして作者が厳格に排除しているものが、他ならぬ犯行に附随する社会的要素なのである。実在のヨーゼフ・アプフェルベクは失業中の電気見習い工であり、父親は工場労働者だ。しかるに詩にあってはヤーコブは名前を挙げられるのみで、両親も「父と母」という記号化された普通名詞で一括され、『家庭用説教詩集』の他の登場人物と同じく社会的存在以前のいわば自然的存在としてとらえられているのが何よりも注目に値いしよう。

事実関係を捨象した簡潔な筆致で犯行を叙述したあと、作者は日常的道具立てを背景として「待ち続ける」ヤーコブに筆を転じるのだが、彼を取り巻く環境描写を詳細に検討する作業は我々を否応なく次の結論に導く。ブレヒトはここでヤーコブの出身階級を、引き上げているのである。

あらためて事実をふりかえるまでもなくヨーゼフは下層階級に属しており、その階級性に着目して犯罪全体を無知と貧困ゆえの悲劇ととらえ、社会告発の1篇に仕立て上げることも十分に可能であったはずだ。しかし1919年時点でのブレヒトは、あえてその道を選ばなかった。ヨーゼフの狭いアパートの代わりにヤーコブには独立した家が与えられ、工場労働者の家庭には本来無縁の新聞屋と牛乳屋の女が作中重要な役割を演じる。実在のヨーゼフが両親の死体を寝室に放置したままであったのとは異なり、ヤーコブは「洗濯ものを入れる戸棚 (Wäscheschrank)」に押しこめるが、これも中産階級の家庭において初めて見受けられるものなのである。

ブレヒトの改変の結果ヤーコブの犯罪は中産階級のもの、換言するなら製紙工場支配人の息子たる作者自身や、詩集の読者と同一階層のブルジョア家庭を舞台として起こった事件へと変貌を遂げる。従来の大道歌が事件や犯人像を聴衆の住む世界からは遠く隔たった、ことさらに特殊なものとして語るのとは対照的に、この作品は我々の日々の生活のすぐ背後に起りうる出来事としてヤーコブの行為を描き出している。ここではもはや、正常な日常生活に対するに異常な犯罪という大道歌が内包していた世界構造は、完全に崩壊しているのである。

しかし以上のような考察を重ねてもなお、先に掲げたこの作品についての我々の疑問には答が与えられぬままになっている。そもそも何故ブレヒトは、心理的にも社会的にも多くの動機を推測させうる貧しい少年の犯罪から、ブルジョア家庭における動機なき殺人物語を創造せねばならなかったか。ここで我々は、テキストそのものの語るところに耳を傾けねばならない。

II

冒頭の2行は、作品全体の性格を決定づけるほどの強烈な印象を読者に与える。特に「和やかな陽」と「叩き殺した」のおよそ意味内容の異なる2語の形作るコントラストが、最終連に至るまでこの詩の基調音を奏でることとなる。ヤーコブの凶行は一切の注釈、前置きを附されることなく読者の眼前

に提示され、「突発性、不意打ちが本質的属性である」¹⁸ グロテスクの最も適切な例として、我々の日常生活に突如として介入してくる異質なものの存在を垣間見させる。

全10連からなるこの詩のうち犯行そのものの描写に割かれているのは冒頭の2行に過ぎず、残りの9連全てが犯行後静かに腐敗していく両親の死体とヤーコブの同居に捧げられている。大道歌の場合は刺激的な語り口の使用によって聴衆の興奮がねられるのだが、ブレヒトの詩のドラマ性は第1連の2行に尽きておりその後はまったく動きのないゆるやかな時間の経過が物語られ、それはあたかもスローモーション撮影の如く無時間的な印象すら読者に抱かせるのである。第2連の空、雲、和やかな夏風はことごとく平和と調和に満たされた外界を思わせる描写であり、犯行の舞台となった家と外部の世界を対置する手法は、「何も変らなかつた、いろいろのことを除くと (nichts war anders außer mancherlei)」という一見論理の矛盾とも取れる文へと引き継がれていく。

日常性の継続は、牛乳屋の女と新聞屋の登場によって一段と強調される。それに効果を添えるのは、副詞「まだ (noch)」の2度にわたる繰り返しである。しかし外界との絶縁、無関心に特徴づけられるヤーコブは、この2つの外界とのパイプをほとんど或いはまったく拒絶する。「飲まない分を、かれはあけて捨てる／というのも飲むこともないのだ、もうあまり」、「がヤーコブ・アプフェルベク、それを読まない。」無行動ともあいまって、このもはや食物を摂ろうともしない彼の姿には彼の植物化が認められ、おそらくはその点にこそとかく論議の対象となってきた謎めいた副題「野の百合」の意味が求められよう。断わるまでもなくマタイ伝第6章第28節を出典とするこの言葉は、ヤーコブの無行動と犯罪意識の欠如から来る無垢さを象徴していると解釈することが出来る。

「また、なぜ、着物のことで思いわずらうのか。野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい。働きもせず、紡ぎもしない。」¹⁹

ようやく引き起こされる周囲の疑惑に対して、「和やかな陽を受けて (im milden Licht)」2度否認する過程が告げられた後ヤーコブは逮捕され、「わからない」の一言のみが我々には残される。

テクスト一読後直ちに指摘しうるキーワードが、「和やかな (mild)」とい

う形容詞であることは異論を差しはさむ余地がないであろう。主にこの言葉によってこそ、作品が与えるグロテスクな効果が産み出されていることは前章の考察が明らかにするところではあるが、単なる効果に尽きるにはこの言葉の5度の使用が持つ意味はいささか重きに過ぎはしまいか。しかも先に引用した新聞報道は、この「和やかな陽」なるものがブレヒトの手になるまったくの虚構であることを我々に教えてくれる。現実のヨーゼフ・アプフェベクの両親殺しは犯罪のためと通常考えられている時間、夜に行なわれているのだ。

更に犯行それ自体を物語るよりもその後の経過の叙述に遥かに多くの分量を費やしている作品展開に即して考えるなら、ヤーコプ・アプフェルベクの話が両親を殺した少年の話としてではなく、より根本的には殺害した両親の死体と共に暮した少年の話として造形されていることが明瞭となってこよう。なるほど彼は死臭を避けようと死体から遠ざかりはするが、それもバルコニーまでである。実は『アプフェルベク』は本来11連からなる詩であったのだが、後の稿において第4連が削除された経緯を持つ。この削除された連をふりかえるなら、ヤーコプをあくまでも家の中に閉じこめておこうとした作者の意図がますます顕れてくる。

戸棚から死体が臭いだしたとき
かれはつつじを買ってきた
そして、あわれな子供、ヤーコプは
その日からソファーで眠ることにした。²⁰

ヤーコプのただ1度の外出の機会であったつつじ買いのエピソードを取り除いたことにより、彼の行動範囲は完全に家の中に限定されるに至るのだ。

実在のヨーゼフと詩のヤーコプとが最も大きな隔たりを見せるのは、実にこの点においてである。なぜならヨーゼフは友人の通報により家を明けているのであり、逮捕されるのも外出から戻ったところだと報道されている。家を離れ、また通報してくれる友人を持つことから明らかなように、ヨーゼフはヤーコプとは違って外界との接触を失ってはいない。

それではテキスト検討を経て我々が到達した2つの問題、キーワード「和やかな (mild)」とヤーコプが家に留まり続けたことはこの不可解な詩の解釈にあたって果たしてどのような可能性を展開させてくれるのだろうか。そ

れを明らかにするためには、『家庭用説教詩集』の世界全体を概観する作業が必要である。

Ⅲ

「ブレヒトは『寒さ (Kälte)』というモチーフ、メタファーを非常に好んで使用した、と言えるかもしれない。それはお気に入りのモチーフであり、メタファーなのだ。——時によってはそのように読みとることも可能だが、それは当てはまらない。ここに提示されているのは、お気に入りのモチーフなどではなく、とりついて離れない観念 (Obsession) なのだ。」²¹

とは、精神分析と文学の関係を追求しブレヒトにおける Kälteschock についての一文を草したペーター・フォン・マットの言葉なのだが、『家庭用説教詩集』に一貫して流れているのも世界の持つ寒さにさらされた人間存在のモチーフである。

寒い風の吹くこの地上に
きみたちはみな裸の赤ん坊としてやって来た。
何ももたないでぶるぶるとふるえて横たわっていた
と、どこかの女がおむつをあてがった。²²

ブランデーと夜の闇でべろんべろん！
前代未聞の雨でびしょびしょ！
氷のような白夜の寒気でがたがた！²³

最後の力をふりしぼって——と、彼女は言う、
だって部屋も凍えるばかり寒かった——
便所まで体を引きずって行って、そこで（それが何時か
もう憶えがない）、さっさと子供が生まれでた
夜が明けそめる頃。²⁴

そして、人間を襲う「寒さ」の対極に位置しそれと同等の重みで『家庭用説教詩集』を支える形象が、かつて戦場にいる兵士が唯一の避難所として思

い浮かべたもの、母親に他ならない。しかもここで口にされているのはもはや母親の全体像などではなく、母胎（Mutterschoß）だ。

白い母胎のなかでパールが育っていたときに
空はもうこんなに大きく、静かで、淡かった
若くて、素はだかで、おそろしくすばらしかった²⁵
やがてパールが来て、空を愛したときのように。

おおおまえたち、天国から地獄から追っばられ
さんざんつらい目をみた人殺したち、
なぜ母の胎の中にじっとしていなかったのか？²⁶
胎の中は静かで、眠っていられたのに。

暖かく安全で満ちたりた場所、母胎から離れるや否や人はこの世の寒さに触れる。この図式はあえてO・ランクの出産外傷説をひかずとも、²⁷『家庭用説教詩集』の幾多の詩に目をさらす時素直に首肯されうる世界構造であろう。海賊、アウトサイダー達は出産によって否応なく暖かい母胎から引き離され、その後の生の中で世界の寒さにまったく無防備に直面しなければならない。

この寒さというモチーフは、1917年頃よりブレヒトの作品に登場してくるのだが『家庭用説教詩集』の時点では寒さもそれを産み出す自然現象も何ら具体的実体を有してはおらず、神に見捨てられた世界全体の冷たさとして人間に襲いかかる。それが1922年頃よりブレヒトの関心が社会的なものに移行するに伴い、かつて極めて抽象的であった寒さは大都市での生存競争の苛酷さを表現するメタファーとなり、貧困にあえぐ人間を苦しめる雪や雨など具体的な形をとるようになる。

最後の晩おれたちは要塞の門の前で立ちっぱなしだった。

いつ着くのかとたずねたら、こう言われた。

今日だ。

3日目だった。晩におれたちは凍え死んだ。

今日この頃貧乏人にとっちゃあんまり寒すぎる。²⁸

寒さは従って、初期のブレヒトにあっては意味のない世界に置き去りにさ

れた人間の孤立感、中期に至る過程においては資本主義社会の苛烈さと、共に人間を取り巻く世界の否定的な面を象徴するモチーフである。しかしながら、世界における人間存在の欠落感を感じずる能力が作家を作家たらしめているとするならば、その時々で意味するものを読み変えられたこの寒さこそ、ブレヒトの作家としての成長を促してきたのだと言うこともできよう。²⁹

たたえよ冷たさを、暗黒を、また滅亡を！³⁰

ブレヒトの内的発展に目をやるならば、暖かい母胎と出産によって別れを告げなければならない時に生ずる Kälteschock の持つ意味が極めて大きいことが理解されえよう。出産が子供の体験する最初の社会化であるとの立場に立つなら、出産と同時に浴びる世界の寒気は彼が成人するために必ず受けねばならない洗礼に他ならない。母親から離れた者は、「悪へ、カオスへと至る」³¹ という図式が『家庭用説教詩集』に登場するアウトサイダー達を特徴づけているのは事実だが、ブルジョア社会からの離脱の試みを取りあえずはアウトサイダーという形をとる上は、世界の寒気の中での彼らの彷徨も避けては通れぬ道なのである。

『家庭用説教詩集』中の一群のアウトサイダーが寒さの体験という共通項で語られる時に、特異なものとして浮かび上がってくるのが終始「和やかな陽」に包まれた13才のヤーコブ・アプフェルベクだ。彼はなるほど両親を殺すという最も反社会的な行為を犯しはするが、他の詩の主人公達のように世界の持つ寒さに脅かされることはない。ヤーコブにおけるこの Kälteschock の欠如は、取りも直さず先の社会化との関連上で見れば、彼がいまだ母胎との分離を果たしていない子供であることの証左だ。「すべては和やかな夏の風のうちに留まり」³²、終結部に至ってもヤーコブの生活空間に何ら新鮮な風が吹きこむことはない。彼は逮捕の瞬間にもなお、「ブルジョア的環境の和やかな陽」³³ によって守られている。

「和やかな」というキーワードを Kälteschock の欠如と解することによって初めて、ヤーコブが家を離れないという設定が持つ意味も明らかな姿をとるようになる。彼は両親を殺害したにもかかわらず、ブルジョア的日常生活と両親の家とが作り出す呪縛圏に捕えられたままなのだ。ヤーコブの親殺しは物理的な次元での出来事にすぎない。この事件の本質は、両親が戸棚の中で腐臭を放ちながらも相変わらず存在し続けている点にこそある。ヤーコブ

は犯行の後もお親との共生 (Symbiose) から逃れることができないのであり、それゆえにこそ社会化と不可分の Kälteschock ともついに無縁に終るのである。ペーター・パウル・シュヴァルツの言葉を借りて言えば、ここでの最大の逆説は、「アプフェルベクの犯罪が、窮極的にはブルジョア的環境の廃止を目指しているにもかかわらず、彼をそこから解放できない³⁴」ことに求められよう。

ペーター・フォン・マットはブレヒトについて、その幻想素材をエディプス的な父—母—息子の三角関係にではなく、母と息子の一対一の関係に仰いでいるおそらく唯一の偉大な劇作家であると適切にも指摘しているが、現代の中産階級に特徴的な父親の権威喪失と母親との密接な心情的結びつきの中で成人した彼にとって、最大の課題は父の否定などではなく母との分離、否少なくともその関係の社会的文脈における問い直しであったはずだ。その証拠に、彼は表現主義の作家達とは異なり一篇の反父親劇も残しはしなかった。³⁶

「機械による大量生産と複雑化した集団管理に関連した仕事の断片化の進行、住居と職場との分離、自営生産者から消費し賃金をもらう労働者、雇用者の地位への移行は、父親の権威の形骸化と父親の家庭内および家庭外の威信の失墜とをたえず促してきた。」³⁷

かつての家父長に代ってブルジョア社会の規範を体現するのは今や母親であり、一方では確かに平和を約束してくれるその母胎の呪縛的な力を断ち切ることが同時に、ブルジョア社会からの絶縁を意味する。³⁸ 従って最後まで「和やかな陽」に包まれて両親の死体に結びつけられているアプフェルベクの犯罪は、一見いかに衝撃的であろうとも既存の社会の何物をも変えはしない。それゆえにこそ家を取り巻く夏の自然は mild なままであり、新聞屋と牛乳屋の女に象徴される日常性も変化することはないのである。

社会に対する反乱ののろしをあげながら、みずからその動機も反乱の後に来たるべき物も知らず、ただ何かを持っている価値体系を喪失した少年としてヤーコブをとらえた時、それはまぎれもなく1919年時点におけるブレヒトの自画像に他ならない。この当時、息子の誕生日にヴェーデキント全集を贈り、『パール』の草稿を自社の女性秘書にタイプさせる程度にはリベラルであった父、息子に自己との同質性を感じ熱愛していた母との関係にも、よう

やく葛藤の影が差し始めていた。ホラティウス（「祖国のために死すは甘美にして、名誉なり」）批判の作文は父との対立を生み、アンチブルジョア的生活態度、なかんずく女友達パウラ・バンホルツァー、通称ビーの妊娠は母親の深い心痛の種となった。しかしそれは、両親との決定的訣別にはまだ至らない。母との結びつきにおける心情的細やかさは失なわれなかったし、彼がアウトサイダーとしての生活を楽しむのは、父親に与えられた屋根裏部屋を舞台にしてのことである。

「ブルジョアの息子は体制内に留まり、表立って反抗することを回避し、同時にブルジョア的でもありアンチブルジョア的でもある避難所へと、つまり彼が特徴的なことに両親の家において住まっているボヘミアン的な部屋へ、志を同じくする者達のサークルへ、自然へそして文学へと引きこもる。」³⁹

ブレヒトもまた、ブルジョア社会に背を向けながらその後に来たるべき物については何ら展望は持ちえず、両親の家での共生のうちにおそらくは何かの到来を待っていた。

8

都市のうちで残るのは、そこを吹きぬけていった風ばかり。
家ってものは食う人間を陽気にする。そいつが家を食い尽くしてしまうのだ。
ぼくらは知っている。ぼくらは通り過ぎていく者であり
あとからやって来る者だって、名をあげる値打ちもないやつら。

9

来たるべき地震のときに、舌が苦くなったからといって
ヴァージニア葉巻の火を消さないでおけたら。
ぼくは、ベルトルト・ブレヒト、アスファルトの
都会へ打ちあげられたもの
くろい森から、母の胎内から、はるかむかしから。⁴⁰

『アプフェルベク、または野の百合』には、母胎という語は姿を現わさない。しかし、ヤーコブが最後まで離れることができなかった家こそ、彼を包む巨大な母胎なのである。

注

底本として右記を用い、以下 GW. 巻数—頁数と略記する。Bertolt Brecht: *Gesammelte Werke in 20 Bänden*. Frankfurt a. M. 1973.

- 1 Klaus Schuhmann: *Der Lyriker Bertolt Brecht 1913-1933*. Berlin 1964, S. 124.
- 2 Vgl. Edgar Marsch: *Brecht-Kommentar zum lyrischen Werk*. München 1974.
- 3 Klaus Schuhmann: a.a. O., S. 124.
- 4 Hannah Arendt: *Benjamin, Brechtzwei Essays*. München 1971, S. 85.
- 5 Ebd.
- 6 GW. VIII-173ff.
- 7 GW. VIII-169.
- 3 GW. XVII-955f. Vgl. Hans Otto Münsterer: *Bert Brecht. Erinnerungen und Gespräche aus den Jahren 1917 bis 1922*. Zürich 1963, S.24f.
- 9 Klaus Völker: *Brecht-Chronik*. München 1971, S. 19.
- 10 Helmut Lethen: *Apfelböck oder der Familienmord*. In: *Bertolt Brechts »Hauspostille«*. Text und kollektives Lesen. Hrsg. von Hans-Thies Lehmann / Helmut Lethen. Stuttgart 1978, S. 47.
- 11 Wolfgang Kayser: *Das Groteske in Malerei und Dichtung*. Hamburg 1960, S. 137f.
- 12 Carl Pietzcker: *Die Lyrik des jungen Brecht*. Frankfurt a. M. 1974, S. 96.
- 13 Michael Morley: *An Investigation and Interpretation of Two Brecht Poems*. In: *Germanic Review* Nr. 46. 1971, S. 9f.
- 14 旧約聖書中のヤコブも、詩のヤコブ同様小屋に留まったままで働きもせず、かつ母との密着の中で生活している。

「さてその子らは成長し、エサウは巧みな狩猟者となり、野の人となったが、ヤコブは穏やかな人で、天幕に住んでいた。イサクは、しかの肉が好きだったので、エサウを愛したが、リベカはヤコブを愛した。」(創世記第25章第27—28節, 日本聖書協会, 聖書, 1968年)

- 15 Carl Pietzcker: a. a. O., S. 79.
- 16 GW. XI-47.
- 17 Carl Pietzcker: a. a. O., S. 79f.
- 18 Wolfgang Kayser: a. a. O., S. 136.
- 19 日本聖書協会, 聖書, 1968年, 9頁。
- 20 Bertolt Brecht: *Bertolt Brechts Hauspostille*. Berlin/Frankfurt 1951, S. 17f.

- 21 Peter von Matt: Brecht und der Kälteschock. Das Trauma der Geburt als Strukturprinzip seines Dramas. In: Die Neue Rundschau Nr. 87/4 1976, S. 613.
- 22 GW. VIII-205.
- 23 GW. VIII-224.
- 24 GW. VIII-178.
- 25 GW. VIII-249.
- 26 GW. VIII-217.
- 27 オットー・ランク (1844—1939) の説によれば、あらゆる不安反応の原型は新生児が出産の時体験する精神的外傷に求められる。
- 28 GW. VIII-296.
- 29 Vgl. Jürgen Bay: Brechts Utopie von der Abschaffung der Kälte. Stuttgart 1975.
- 30 GW. VIII-216.
- 31 Fritz J. Raddatz: Ent-Weibliche Eschatologie. In: Text+Kritik, Bertolt Brecht II. Hrsg. von Heinz Ludwig Arnold. München 1973, S. 152.
- 32 Hans-Thies Lehmann / Helmut Lethen: a. a. O., S. 53.
- 33 Peter Paul Schwarz: Brechts frühe Lyrik 1914—1922. Bonn 1980, S. 174.
- 34 Peter Paul Schwarz: a. a. O., S. 175.
- 35 Peter von Matt: a. a. O., S. 621.
- 36 拙稿『初期ブレヒトにおける母親像の周辺』人文研究, 1980年, 第32巻第3分冊, 163頁—173頁参照。
- 37 Alexander Mitscherlich: Auf dem Weg zur vaterlosen Gesellschaft. München 1978, S. 183.
- 38 ブレヒトが明らかに影響を受けたと思われる、やはり肉親殺しを題材とした、これもまた大道歌 (Bänkelsang) を模している詩にヴェーデキントの「おば殺し」があり、一方ブレヒトの影響のもとに書かれたと推測される作品に、Eine Moritat と副題を附されたペーター・ヴァイスの戯曲「客のいる夜」がある。いずれもブルジョア批判と社会変革を課題としつつ、互いに遺産を継承しあう関係にあったこの3人の作家における親殺し——「おば」は親の、おそらくは言いかえにすぎない——のテーマの系譜について考察することは、興味深い展望を開いてくれるであろう。
- 39 Carl Pietzcker: a. a. O., S. 144.
- 40 GW. VIII-262f.

付記 「家庭用説教詩集」所載の詩の訳に際しては、「家庭用説教集」野村修・長谷川四郎訳、晶文社、1981年を適宜参考にした。